

# 8月のお盆参りについて

JINZUJI

今年も、皆様のご家庭へ、お盆参りに伺います。9～12日は予約制で伺いますが、13～15日は日時の指定ができませんので、よろしくお願い致します。

## 8月9日(日)～12日(水)

お電話にて、あらかじめお参りの日時をご予約ください。ご希望の時間帯にお参りに伺います。

## 8月13日(木)～15日(土)

家族総出で、地域毎に別れてお参りに伺います。天候や交通事情などにより、日時の指定はできませんので、ご了解ください。

※久々野～一ノ宮方面は、11日の午前中、飛騨市～国府方面は、12日の午前中に伺います。

※初盆のご家庭は、13日の午前中に伺います。

※8月の月参りはお休みとなりますが、祥月命日など、お参りを希望される場合はお電話ください。

あまぎしじょうえん

## 天岸浄圓先生のご法話です！

8月23日(日)～27日(木)、飛騨組仏教講習会が開催されます。円光寺(飛騨市古川町)、大国寺(飛騨市神岡町)で、天岸浄圓先生(行信教校講師)のご法話をお聴聞できます。ぜひお出かけ下さい。

神通寺報

第263号

(2015年 7月号)

〒506-0021

高山市名田町5-30

明林山 神通寺

住職 朝戸 臣統

0577-32-3614 (TEL/FAX)

asato@jinzuji.com

www.jinzuji.com

神通寺報 配布スタッフの皆様(敬称略)

不破 朝子・三枝 勝・黒田 はな・中垣 久美子・中澤 一弘・塚本 清洋・中田 泰子・永富 登代子・石垣 美代子・洞口 義武・松尾 衿子・片岡 節子・畠山 正一・松本 文男・阿多野 正昭・柴田 和子・安藤 礼子・成畑 瑛子・松川 浩幸・大萱 勝・谷口 忠雄・若田 義隆・千原 繁・大野 光夫・原田 尚子

# ただ念仏のみぞまこと

戦後70年によせる平和への願い（浄土真宗お言葉）

ただ今、皆さまと共にお勤めいたしました「平和を願う法要」にあたり、第二次世界大戦で犠牲になられたすべての方々に対し、衷心より追悼の意を表します。

70年前の8月6日、たった一発の爆弾によって、一瞬にして美しい広島町が破壊され、多くのかけがえのない命が失われました。また、原子爆弾もたらした惨禍は、放射能の影響として、また痛ましい記憶として、今も多くの方々を苦しめています。この事を思うとき、あらためて人間の愚かさ、戦争の悲惨さ、原子爆弾の非道さを感じずにはいられません。

私は、皆さまと共に、戦後70年を迎える広島の地で、平和への願いを新たにすることに深い意義を感じています。

第二次世界大戦が終わって70年が経とうとしています。しかし人類が経験したこともなかった世界規模での争いが起こったあと、70年という歳月が、争いがもたらした深い悲しみや傷みを和らげることができたでしょうか。そして、私たちはそこから平和への願いと、学びをどれだけ深めることができますでしょうか。

戦争の当時を生きた方々が少なくなっていくなかで、戦争がもたらした痛みや記憶は遠いものとなり、風化し忘れられつつあります。また先の大戦において、本願寺教団が戦争の遂行に協力したことも、決して忘れてはなりません。こうした記憶の風化に対し、平和を語り継ぐことが、戦後70年を生きる私たちに課せられた最大の責務です。より良い未来を創造するた

めには、仏智に教え導かれ、争いの現実に向き合うことが基本でありましよう。

そもそも、あらゆる争いの根本には、自己を正当とし、反対するものを不当とする人間の自己中心的な在り方が根深くあります。宗祖親鸞聖人は、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそれごとくはこと、まことあることなし」と、人間世界の愚かさを鋭く指摘されています。私たちが互いに正義を振りかざし、主張しようとも、それはいずれも煩惱に基づいた思いであり、阿弥陀如来の真実のはたらきの前では打ち崩されていくより他はないという事でありましよう。それはまた、縁によって、どのような非道な行いもしかねないという、私たち人間の愚かさに対する警告でもあります。

いかなる争いにおいても悲しみの涙をとまなうことを、私たちは決して忘れてはなりません。受けがたい人の身を受け、同じ世界に生まれ、同じ時間を生きている私たちが、お互いを認めることができます、どうしてこの上、傷つけ合わねばならないのでしょうか。一つひとつの命に等しくかけられている如來の願いがあることに気付かされる時、その願いのもとに、互いが互いを大切にし、敬い合える社会が生まれてくるのではないのでしょうか。少なくともお念仏をいただく私たちは、地上世界のあらゆる人々が安穩のうちに生きることができるとして、最大限の努力を惜しんではなりません。

戦後70年という歳月を、戦争の悲しみや傷みを忘れるためのものにしてはなりません。そして戦後70年というこの年が、異なる価値観を互いに認め合い、共存できる社会の実現のためにあることを、世界中の人々が再認識する機会となるよう、願ってやみません。

2015（平成27）年7月3日 浄土真宗本願寺派門主 大谷 光淳

浄土真宗本願寺派（お西）では、

七月三日、広島市の平和公園で「**平和を願う法要**」が営まれ、ご門主がお言葉述べられました。また、真宗大谷派（お東）では、昨今の政治状況に対して、非常に危機感を持った声明が総長名で出されました。どちらも、戦後七〇年を振り返り、平和への歩みを新たにしていきたいとの願いが示されています。



ご門主の前でお言葉を述べられる大谷光淳門首。

私自身、様々な研修会や勉強会を通して、本願寺教団の歩んできた歴史を学んできました。そこで知ったのは、七〇年前の敗戦に至るまでに、戦争に協力し、荷担してきた教団の姿がありました。

☆☆☆☆☆☆☆☆

今から八〇〇年ほど前、親鸞聖人は、阿弥陀如来の救済によるお念仏のみ教えをお示しくださいました。様々な苦悩を抱え、自ら抜け出すことができずに沈み続ける私であればこそ、「**必ず救うぞ。われにまかせよ。**」

との願いを南無阿弥陀仏の六字のお名号に成就して、必ず浄土に生まれさせて仏と成らせる身に定めて下さるのです。

その教えをよりどころとし、お念仏申してゆく生き方を示され

ていたにも関わらず、私たち浄土真宗の教団は、阿弥陀様のお救い（真諦）を死んでから「のみ」に限定し、生きていけるうちは世俗の社会体制（俗諦）に従いなさい、という教義理解に陥っていききました（真俗二諦）。つまり、社会体制と共存していくために都合がいいように、二つの価値観を使い分けていく教義理解をしたわけです。その結果、明治から昭和にかけて、国家が戦争に突き進んでいく時代には、阿弥陀様の救いさえも世俗の価値観に引き寄せ、戦争協力を賛美し、敵のいのちを奪うことが大切だという

「戦時教学」を説きました。第二次大戦を聖戦と位置づけ、「善なるものを救済せんが為には殺生といふこともその方法の一として採用して然るべきである」（昭和十九年『宗教報国』より）と説いて、敵対するもののいのちを奪うことが善であり、菩薩道であり、救いの道であると説いてきた事実があるのです。

☆☆☆☆☆☆☆☆

ですから、私が非戦・平和の問題に取り組み、向き合っていくのは、そのような教義理解を門徒の方々に説いてきた僧侶や教団の歴史があるからなのです。まずは、その歴史を率直にお伝えし、門徒の皆さまに謝らないといけません。その上で、どうか一緒に、本来の真宗門徒としての生き方をめざしていただけませんか、とお願いしたいのです。

過去に学び、現在を知り、未来を考え  
ていくことで、私自身の歩みが明らか  
になり、皆さまと共に歩む方向が定まるの  
ではないかと思うのです。

☆☆☆☆☆☆

ご門主は、「そもそも、あらゆる争い  
の根本には、自己を正当とし、反対する  
者を不当とする人間の自己中心的な在り  
方が根深くあります。」と述べられます。  
これは、価値観が反対の者同士が争うと  
きばかりでなく、一緒に非戦・平和に取  
り組もうとするお互いにも起こります。

「そんなやり方ではダメだ。こういうやり方をしないといけない。  
貴方のやり方は物足りない、間違っている。」と。

私の考え方が真実だ、私の行動こそが正義だと思っていること  
が、必ずしも相手の真実や正義と一致するわけではありません。  
そのときに、自分の真実や正義を振りかざして、相手を屈服させ、  
従わせようとする自分がいることに気付かされます。

親鸞聖人は、

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつ  
てそらごとははごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞま  
ことにておはします」(『歎異抄』より)

と示されます。お念仏の真実性によって明らかにされるのは、我

熱心なご門徒さんと共に、み教えを味わいました。



が身の凡夫性、社会の無常性なのです。  
過去の反省から始まる未来への取り組みさえ  
も、「私の善、私の正義」と握りしめ、相手を屈  
服させようとするれば、我が身の煩惱の延長にしか  
なりません。このことは、常に私がお念仏から問  
われていることでもあります。

☆☆☆☆☆☆

阿弥陀様は、この世のすべてのいのちに、等し  
く尊い願いをかけて下さっているのだとお聞かせ  
いただいたとき、そこに壁を作って区別・選別・  
差別しながら、争いを起こしている我が身の凡夫  
性、社会の無常性が明らかにされます。だからこ  
そ「ただ念仏のみぞまこと」と頷かれるでしょう。

凡夫である私、無常の社会を生きる私を、掴め取って捨てるこ  
とがないという阿弥陀様の支えこそが、私のよりどころとなつて  
いきます。そのような私が救われる教えであればこそ、すべての  
いのちが等しく救われ、互いを大切にし、敬い合える社会が生ま  
れてくるのでしよう。

過去を学び、現在の私を支えて下さるみ教えをよりどころとし  
て、異なる価値観を持つお互いを尊重し、敬い合いながら、とも  
に生きていける社会の実現に向かって、常にお念仏に問い聞きな  
がら歩んでいきたいと思えます。